International Workshop 2011を終えて

テーマは“細胞におけるカルシウムダイナミックス”

１月 21 日（金）午後１時から、大学院医学研究科主催による International Workshop 2011 がラマツイーニホール小ホールで開催されました。“細胞におけるカルシウムダイナミクス”を全体のテーマとして、国内外から著名な研究者４名（国内２名、国外２名）をお招きし、最先端の研究発表を拝聴することができました。

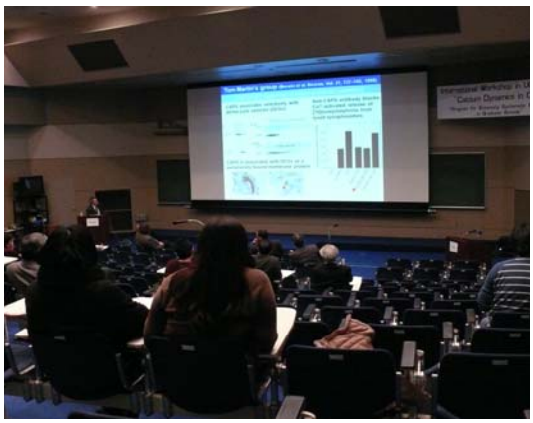
まず、Dr. Alexei Verkhratsky（英国マンチェスター大学教授）は、”Glial ionotropic receptors and calcium signaling”という題目で発表されました。Dr. Verkhratsky は、国際専門誌 Cell Calcium の Editor-in-Chief でこの分野の第一人者です。ご講演では、グリア細胞の研究の歴史から始まり、脳内のグリア細胞の重要性に関する最新の研究成果まで言及されました。

次は、古市貞一先生（理化学研究所チームリーダー）による”Enhanced secretion of BDNF by CAPS2 is critical for proper brain development and function”というご発表でした。CAPS（Ca^{2+}-dependent activator protein for secretionの略語）２というタンパクの生体での役割について、シナプスレベルから行動（自閉症にも関与している）までを解き明かされた大変素晴らしい内容でした。

３番目は、近藤宣昭先生（玉川大学学術研究所特別研究員）による”Control of calcium source in myocardium and hibernation hormone”というご発表でした。”Hibernation”とは冬眠を意味します。冬眠動物（シマリス）の体内に発現する冬眠特異的タンパクの発見とその作用の解明に至る経緯には大変驚かされました。

最後に、Dr. Govindan Dayanithi（チェコ共和国科学アカデミー実験医学研究所教授）による”Ca^{2+} signalling and Ca^{2+} homeostasis in the peptidergic neurones and terminals of the hypothalamus”というご発表でした。下垂体後葉ホルモンとして知られるバゾプレッシンおよびオキシトシンのカルシウムイオンによる分泌制御について概説後に、最近の知見について話されました。

講演者の方々のご発表はいずれも素晴らしく、サイエンスの面白さ、奥の深さ、そして思わぬ展開と広がりを知ることができました。また、英語による質疑応答にも関わらず参加者の方々が熱心に質問されていました。最後になりましたが、６０名を超える方々にご参加いただきましたことを厚く御礼申し上げます。

なお、本 Workshop は第１生理学、第２生理学および薬理学講座が共同して企画を担当し、文部科学省補助金事業「組織的な大学院教育改革推進プログラム」国際産業医学研究者育成教育イノベーションによる援助を受けて開催されました。

（第１生理学　教授　上田　陽一）